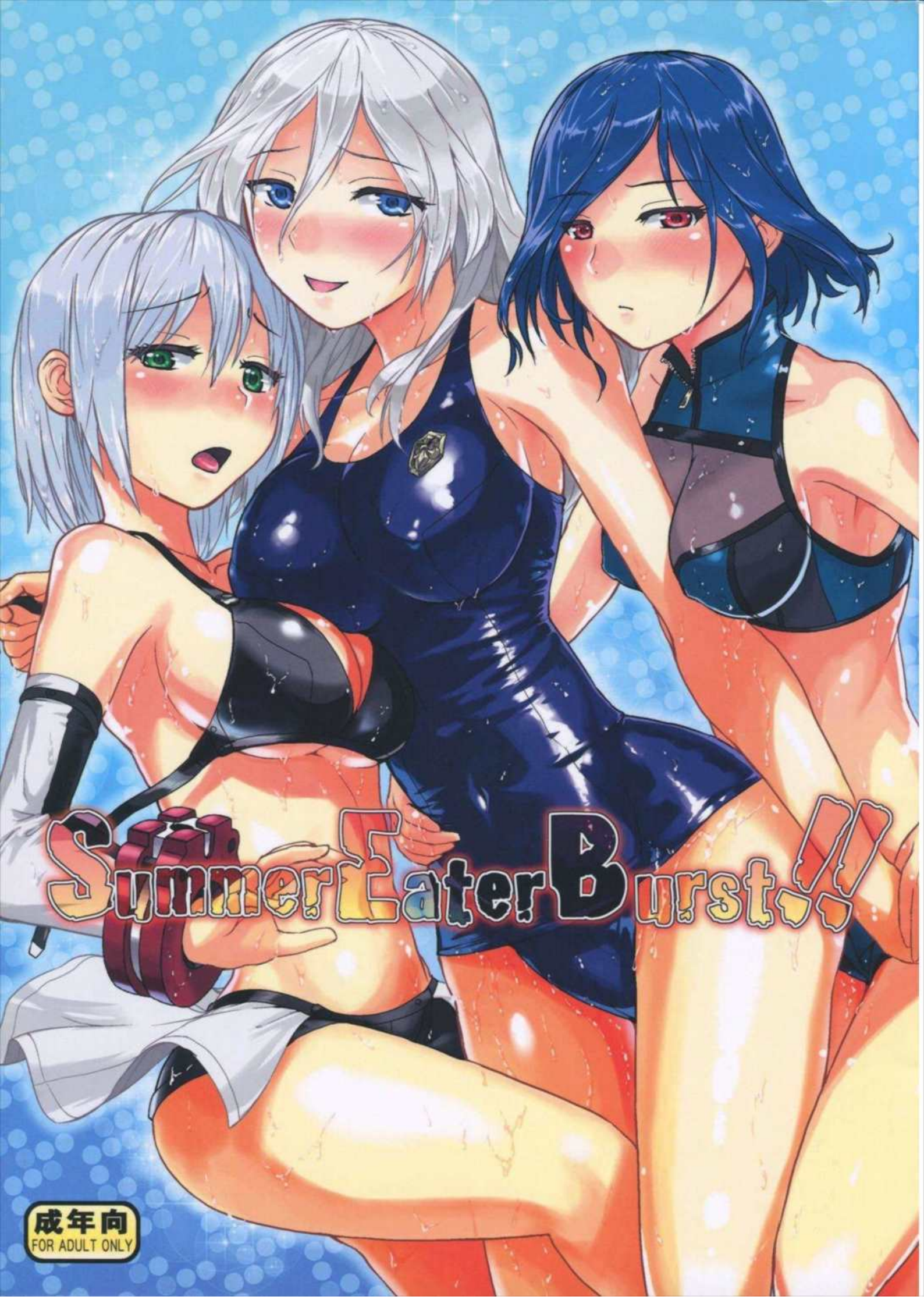

Summer Eater Burst!!
成年向
FOR ADULT ONLY

SummerEaterBurst!!
FOR ADULT ONLY

「あの…やっぱり、私、コレ着て戦わなきゃダメですか…？」
「一応、正式なオーダーだからな…。着心地とか動き易さとか、テストしてくれって。済まないが我慢してくれ」
「うう…」
落胆した様にアリサは肩を落とした。彼女が着用しているのは、今夏フェンリル技術開発部がＯＣ技術を結集して開発したという触れ込みの、夏用制服の試作品である。
…うん。どう見ても立派な水着です。コウタに見せられたノルンの旧時代の資料にこんなのがあったはずだ。確か、学生用の水着だったはず…
かく言う自分もこれまたテストと称してボクサーパンツに袖無しジャケットという開放感あふれるコーディネイトを強いられている。これから海水浴にでも行けってのか？
…しかし。
「うう…手足が出すぎです。直射日光はお肌の大敵なのに…」
正直、目のやり場に困る。白い肌にうっすらと浮かぶ汗が陽光を反射してキラキラと煌めいて眩しいから…ではない。若干サイズが小さい水着――もう水着と呼んでも構うまい――なので、彼女の身体のラインが赤裸裸に浮かび上がってしまっているのだ。
贔屓目に見なくてもスタイル抜群のアリサが、こう言っては何だが、デザインとしては垢抜けない水着姿をさせられているというのがこれまた妙な背徳感を感じさせて…
「まぁ、今回のミッション限りですよね。こんなのを着るなんて」
「…そうだな」
おれは生返事を返しながら、神機を携えて歩き出した彼女を…正確には彼女の尻を目で追った。形のいいお尻に水着がきつく食い込んでいる光景を細部に至るまで余すところなく捉え、その映像を記憶に強く焼き付ける。
「どうしました？」
「…いや、すぐ行く」
怪訝な顔で振り返るアリサに答えながら、おれも自分の神機を担ぎ上げた。
今日はいい仕事ができそうだ。

自己記録を更新する早さでアラガミを狩り終えて、おれはアリサを物陰に引っ張り込んだ。
「り、リーダー？」
不安げな彼女の声。しかし、おれを見詰める彼女の瞳は、これから自分の身に起こる出来事への期待と焦燥に揺れていた。
「あー、喉が渇いた。アリサ」
「は、はい？」
「ただの水をおいしく飲むやり方があるんだけど、協力してもらえるか？」
保冷ポットのフタを外しながら、おれの視線は彼女の豊満な胸に吸い寄せられている。
「…イヤな予感しかしませんけど」

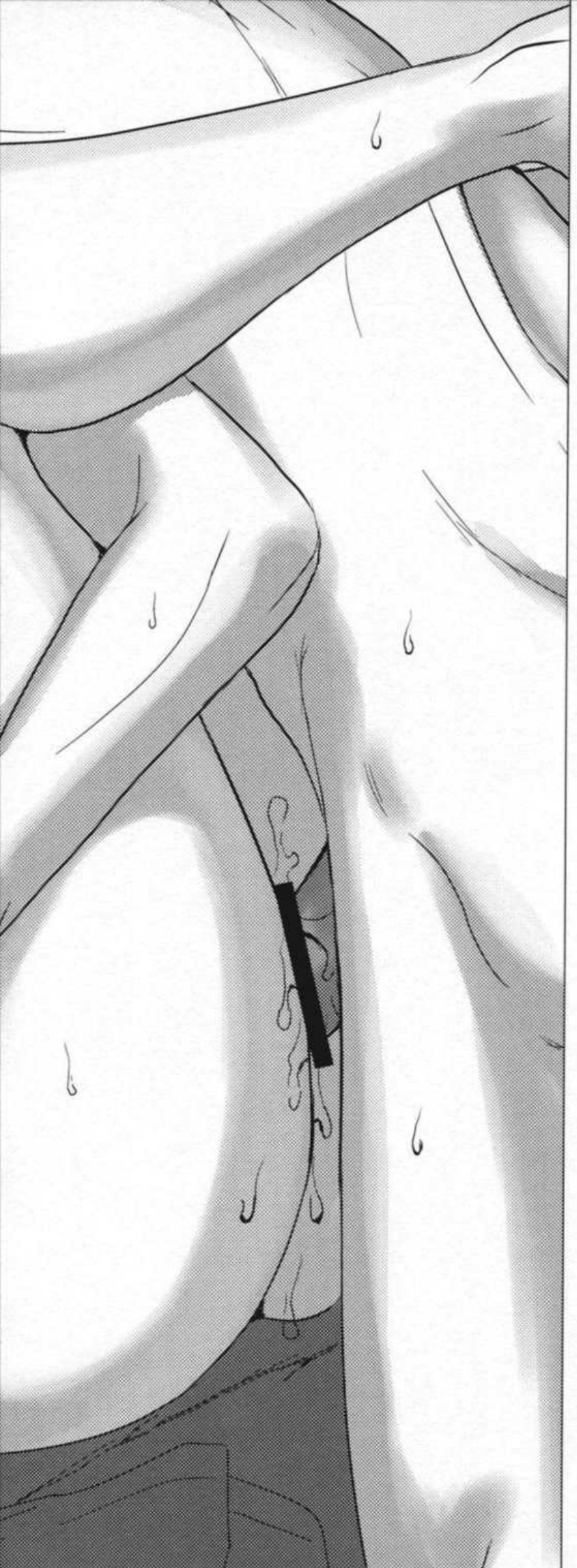
トプトプと音を立てて、水筒から流れ出した冷水が彼女の胸元に注がれる。
「きゃ…っ」
突然の冷たさに驚いたのか、彼女はびくっと身を縮こませた。
「こぼしたら勿体ないぞ」
可愛らしい反応に思わず頬がにやけそうになる。
「も、もうっ。何をするかと思えば、こんな変態じみた事させるなんて、ドン引きです」
上目遣いで抗議する、彼女の紅潮した顔から視線を下に転じれば、柔らかな乳房の谷間を透明な液体が満たし、強い夏の日差しを受けてきらきらと輝いている。
「綺麗だな。カメラ用意しとけば良かった」
「こんなの写真に残して、誰かに見られでもしたらどうしてくれるんですか」
「そん時は、おれが責任とるしかないかなぁ」
おどけて言うと、アリサはぷいと顔を背けた。
「バカなこと言ってないで、飲みたいなら早く飲んじゃって下さい」
腕が疲れました。などと憎まれ口を叩きつつ、内心まんざらでもないのだろう。耳まで赤くなっている。
無性に喉が渇くのは暑さの所為だけではないのかもしれない。おれは彼女の胸元の甘露に、齧り付く勢いで口を寄せた。

「あっ…んあっ…あぁっ…」
抽挿の度、か細い悲鳴にも似た泣き声を上げるアリサの唇を口づけでそっと塞ぐ。
「ふっ…ん…っ……っ……」
キスをして、舌を絡め合い、互いの唇を甘く食み合う。
乳房に手を這わせ、形を確かめる様に優しく揉み、硬くなった乳首を指先で転がす。
恥じらう様に身悶えして逃れようとするアリサの、細く引き締まった腰をしかと掴まえて、猛然と陰茎を突き入れる。
「あああぁっ！　はぁぁっ！　あっ！　あぁぁぁ！」
アリサの良く通る声が無人の街に響いた。近くで作戦中の部隊がいれば聞かれてしまうかも知れないが、そんな事はもうどうだっていい。もっといい声で鳴かせたくなり、思い切り引き抜いた自身を奥まで一突きに貫いた。
「っ！？　っあぁぁあぁあぁぁぁぁぁ！」
快感で一杯になっているアリサには、誰かに聴かれたら…などと心配する余裕はない。甲高い悲鳴と共にアリサは裸身を小刻みに震わせて達した。
きつい締め付けを歯を食いしばって耐え凌ぎ、絶頂の余韻に身を震わせるアリサの涙を唇で拭い、優しく頭を撫でてやる。
「はぁ、はぁ…ん…ぁ…ん♥」
それに答えるかの様に、アリサの秘肉はひくひくと嬉しそうに蠕動しておれの陰茎に縋り付き、早く、早くと言わんばかりに射精を催促してくる。
「アリサ、お前……反則だぞ」
「え…？」
きょとんと目を瞬かせる仕草が憎らしいほど可愛らしい。無意識的にやっているのか確信犯的にすっとぼけているのか……定かでないが、いずれにしろ確実なのは、アリサの中に包まれているおれ自身の限界が近いという事だ。
臨界寸前にまで張り詰めた陰茎を、蕩けきったアリサの中に勢い良く突き込む。
「っ！　んぁあぁぁぁぁぁあぁあぁ！　あっ！　あぁぁっっっ！」
絶頂醒めやらぬ処に更なる快感の追撃を打ち込まれ、声にならぬ声でアリサは吠えた。びくん、びくんと跳ねる彼女を押さえ付けて、猛然とピストン運動を繰り返す。
「はぁ、はぁっ、はっ、はぁっ」
「んぉおぁぁあっ！！　あぁぁぁ、あぁぁあぁっ！！！」
おれの汗がアリサの白磁の裸身に落ちて弾ける。甘やかな嬌声がより一層の熱を帯びる。
熱い日差しの下、おれ達は獣の様に絡み合い、一つに溶け合って果てた。

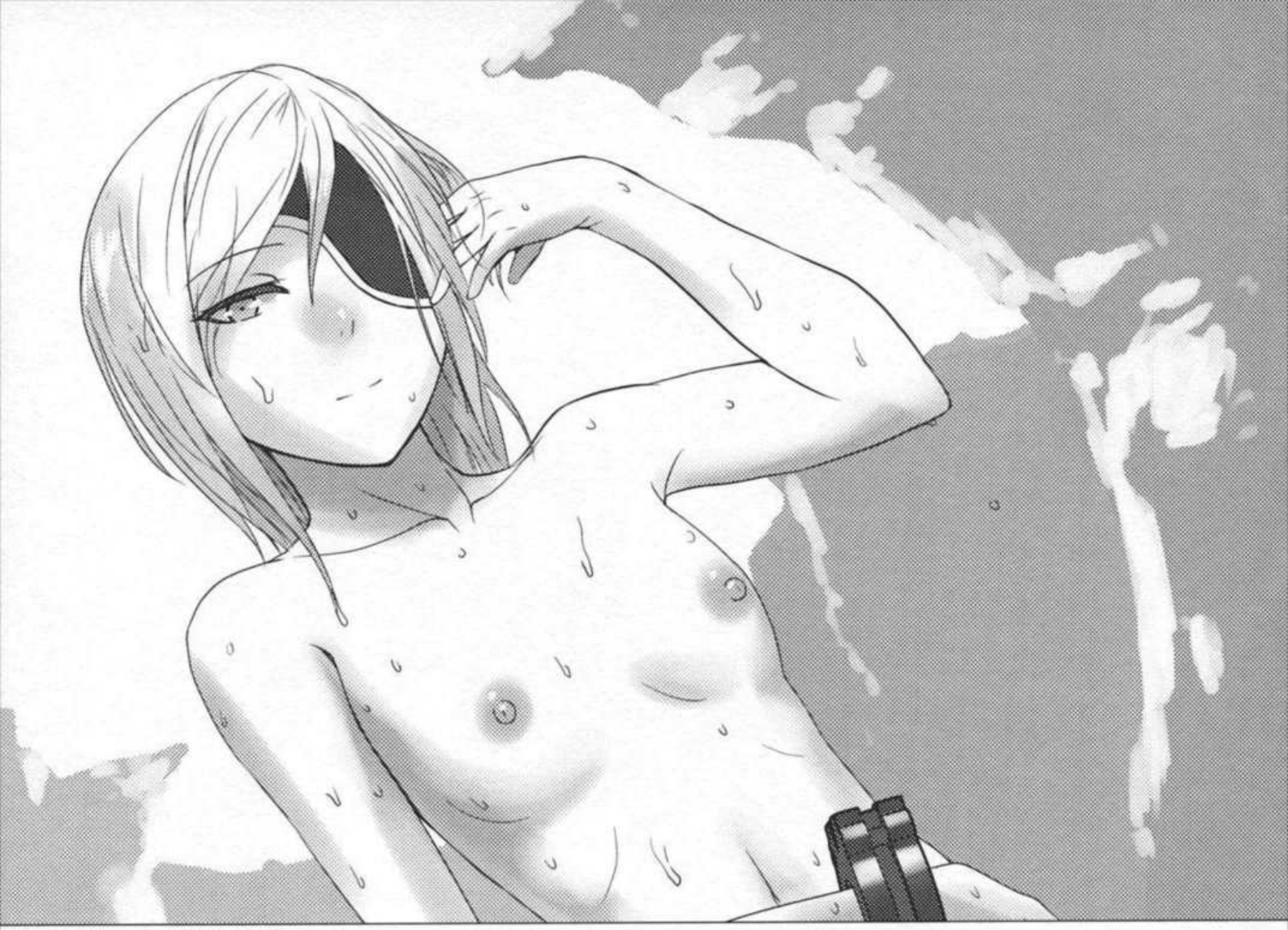
「ふ、あ…オ…レ、もうだめ…」
「あぁんっ、ウソはダメよ？　まだおちんちんこんなにカチカチじゃない…」
仰向けに寝転んだコウタの上に跨がり激しく腰を振っているのは、彼と同じ部隊の同僚で、名目上は彼の上司にあたる。
あられもなく曝け出された豊かな乳房が、彼女の激しい動きに同期してゆさゆさと揺れている。プラチナの髪が陽光を浴びて輝いている。
「気持ちいい…気持ちいいよぉ…」
裸身に浮かべた汗の珠が律動と共に空中に散る。日の光を浴びて煌めくそれを、綺麗と思う余裕は今のコウタにはない。彼女――精強で名を馳せる極東支部の第1部隊の、精鋭の中の精鋭――が、コウタの精を本気で搾り取りにかかっているのだから。
「大体、アンタから誘ったんだから、責任とってよね。これ、上官命令ね♡」
「……い、イエス・マム……」
甘く蕩けた翡翠色の瞳にサディスティックな輝きを見出して、コウタは引き攣った笑みを浮かべた。
布面積のやたら少ない制服（夏服の試作品、らしい…）姿で少し恥ずかしそうな彼女に欲情して白昼堂々行為を迫ったのはコウタ自身だったのでその点については反論の余地はない。夏の開放感がそうさせたのか？　熱くてちょっとラリっていたのか？　そもそも事に及べば大体反撃を喰らってこうなる事を既に知っているのに、負けじと彼女に挑んでしまうのは惚れたなんとやら、という奴だろうか？
「ふぁぁ…コウタのおちんちんすごいよぉ、もっとおっきくなってるぅ…♡」
……いや、単にオレがマゾなだけか？　もしかして……
「フニャフニャになるまで…あんっ…可愛がってあげるから…ね？」
小首を傾げてにっこりと微笑む仕草たるや、天使か慈愛の女神かと思わせる愛らしさだ。口元から垂れた、精子混じりの涎をぺろりと舐めた瞬間を見なかったことにすれば、だが。
眩しい太陽、その下で健康的な身体を踊らせる彼女のシルエットが、朦朧として意識を失う直前、コウタの瞼の裏に鮮烈に焼き付いた。

「ん……おっぱい吸いながら休みたいだなんて、赤ちゃんみたいね」
「んぷ……赤ちゃんはこういう事しないでしょ」
「…それもそうね」
膝枕で介抱していたコウタから「おっぱい吸わせて」といい笑顔でおねだりされた時は流石の彼女も躊躇を覚えたが、彼が倒れた原因が原因なので無下に突っぱねるのも気が引け、渋々と、それでいてちょっぴり嬉しそうにコウタを抱きしめ、露にした乳房を彼に含ませた。それ以上の行為は決してしない、という条件付きで。
不思議な柔らかさと確かな弾力を兼ね備えた彼女の乳房がコウタは好きだった。
先端でぷっくりと主張する乳首を時折舌で舐め転がし、キスを繰り返し、出ない母乳をちゅうちゅうと吸う真似をする。先程までの激しい行為の残滓か、うっすらと汗の味がした。
「ん…あんまり遊ばないでよ。またおかしくなっちゃったら困るじゃない」
「そりゃ怖いね…」
普段は温和で朗らかな人柄の彼女だが、興奮が高まると自分で自分を抑えられなくなる。今回も行為に夢中になるあまりコウタの体を気遣う事が出来なかった。
「ダメね、あたしって。一旦スイッチ入っちゃうと歯止め効かなくて…」
「いいじゃん。オレ、エッチな時のアンタも好きだからさ」
「バカ」
顔を真っ赤にして怒る彼女に安堵と愛おしさを感じて、コウタは笑った。つられて彼女もくすくすと笑った。
「…ね、コウタ、気持ちいい？」
「うん。気持ちいい」
「ふふ」
彼女の掌が優しくコウタを撫でる。桜色の乳首を口中で転がしながら、コウタは彼女に密着する様に身を寄せた。

お母さん、コトミ。元気かな。カノンです。
突然だけど、私、汚されちゃいました。怖い人に襲われて、無理矢理…
凄い声で脅されて、乱暴に押し倒されて……怖くて、抵抗なんてしようとも思わなくなっちゃいました。
今、その人は私の胸の谷間に、大きくなったおちんちんを擦り付けてます。
男の人のおちんちんなんて見た事もなかったのに、もうすっかり慣れちゃいました。
コトミ。お姉ちゃん、もうきれいな身体じゃなくなっちゃったけど、お姉ちゃんのこと、どうか嫌いにならないでね……
「……オイ、おめえ反省してねェだろ……」
あ……声に出ちゃってましたか？
「声に出さなくてもなァ、おめえが碌でもねーこと考えてるってわかんだよ俺様には」
スゴいです！　流石は新型さんですね。
「ブワァーカ！　感心してるヒマがあったらおめえもちったぁ学習しろィ！！」
ひっ！　ご、ごめんなさい……でも、誤射はワザとやってるわけじゃないんですよ？
「ッたりめーだ！　アレがワザとだったらてめェ、素っ裸にひん剥いてアラガミの群れン中に放り込んでビビってションベンちびるとこ激撮してアナグラで上映会開いてやらァ」
ひぃ！！　怖い事言わないで下さいよぅ…
「ッたく、俺が気持ちよくバケモノと殺し合ってるッてのに、遠慮なく俺ごとぶっ飛ばしやがって……一張羅は台無しだし、折角の素材はおじゃんになっちまうし、最悪だぜ」
…こちらの新型ゴッドイーターさんは未熟な私に良く同行していつも助けて下さるのですが、私はと言えば失敗して新型さんの脚を引っ張ってばかりで。
ミッションで誤射する度に、こうしてミーティング…と言うか、反省会を兼ねて私の身体を使ったご奉仕でお詫びをしていたんですけど……もう日課みたいになっちゃいました。
…えと、気持ちいいですか？
「まぁ、悪かねェな……無駄に乳だけはでけェもんな、お前」
むー……失礼です。まるでおっぱいの大きさしか取り柄がないみたいじゃないですか。
いくら新型さんとは言え、年下の男の子にそこまで言われたら私だって黙ってませんからね？
おっぱいで挟みながら、おちんちんの先っぽをペロペロ舐めちゃいます。
「うぉ…っ」
コリコリの乳首でこちょこちょついてあげたり、おちんちんを掴んで先っぽをおっぱいに優しく擦り付けてあげたり、とか。
……あ、おちんちんピクピクしてますね。効果あり、みたいです。
「ちっ……どこでンな小技覚えやがった？」
ふふふ、アナグラ女子の情報網を侮らないで下さい。彼氏持ちの女の子たちから、こういう時のやり方、いっぱい教わってきたんですからね。
今まで受け身の一方でしたけど、今日は私が主導権を握っちゃいますからね？　もうイヤだってくらい、精子いっぱい出させちゃいますからね？
「……男のチンコ弄るテク磨く前に射撃のウデを磨けっての」
……はい……



お母さん、コトミ。カノンです。
今日は奇跡的に誤射せずに済みました！　すっごく調子もいいし、これも秘密の特訓の成果が出ているのかもしれません。いつも付き合って下さる新型さんに感謝しないと。
「……イイ心がけじゃねぇか」
今、その新型さんと任務後のミーティング中です。ミーティングっていうか、日課みたいになってる例のアレ…の最中なんですけど。
「だがな、てめぇの腕が上がった訳じゃねェぞ？　俺がてめぇのヘタクソな砲撃を必死こいて避けてるから当たらねェんだ。わかってんのか、エエッ？」
そ…そうでしょうか？　でも、一発も当たらなかったんですから、結果オーライですよ！
「ザケんなコラァ！　敵と味方の両方から撃たれる俺の身にもなりやがれェ！」
あぅん！　そんな……新型さん激しすぎですよぉ、そんなに激しく求められたら私、お腹がキュンキュンしちゃいます…
「……あーもう、いちいち突っ込むのも面倒臭ぇ。ヤる事ヤってさっさと帰投すっぞ」
…もう、面倒臭いって言いながら……すっごく元気じゃないですか……なんていうか、前より男らしくなりましたよね、新型さん。
「あ？　そうかァ？　ま、てめぇに付き合ってアクシデントには強くなったかもなァ」
最近、大活躍であちこちに引っ張りだこですもんね。お陰で会う機会も減ってしまって……ちょっぴり、寂しいです。
「……あァ？」
でも、新型さんが強くなったのが自分のおかげだと思うと、なんだか誇らしいです！
「だ・か・ら！！　俺様が！　鍛えられて！　どうすんだ、コラァ！！！」
ひゃうっ！？　そ、そんなにされたら……おかしくなっちゃいます……
「そう言うてめえは、最近弛んでるよなァ？　コイツぁ久々にお仕置きが要るな、オイ…」
あ……獲物を見つけた猛獣みたいな新型さんの眼差しが、私を見ています。ちょっぴり怖いですけど、これから彼にされる事を想像すると、身体がかっと火照りました。
「泣いたって喚いたって止めてやらねェからな。判ってるだろうなァ…」
彼の声すらもなんだか心地良く感じられて、ソクソクが止まりません。
……今日は、いつもより長くて、すっごく中身の濃いミーティングになりそうです。
だから、帰りが遅くなると思うので、今日の晩ご飯はいりません。
「……おめェーッ！　家族になんつうメール送ろうとしてんだァーーーッ！！！」
「あれ？　そのメール……わーっ！　ごめんなさいっ、送信先間違えてました！」
「そう言う問題じゃねェ！！！」



「ここ、私のお気に入りなのよ」
任務後、見せたいところがある、と彼女に誘われ訪れたのは、清涼な水を讃えた小さな泉だった。
雪解け水が地下を伝い、ここに湧き出しているのだろう、と彼女は言う。濁り気のない水面にはまばらに水草が揺れるのみで、魚など動く生き物の姿は見当たらない。アラガミに喰われたか、或いは綺麗すぎる水が却って彼らを遠ざけるのだろうか。
しゅるっ。おもむろに、彼女は俺の目の前で纏っている衣服を脱ぎ始めた。
「あら、今更遠慮する様な仲でもないじゃない？」
慌てる俺を尻目に、彼女は生まれたままの姿を露にする。
「さあ、楽しみましょ？」
悪戯っぽく笑う彼女の、肉感的とは言いがたい痩せぎすの身体に、しかし俺は目を奪われていた。

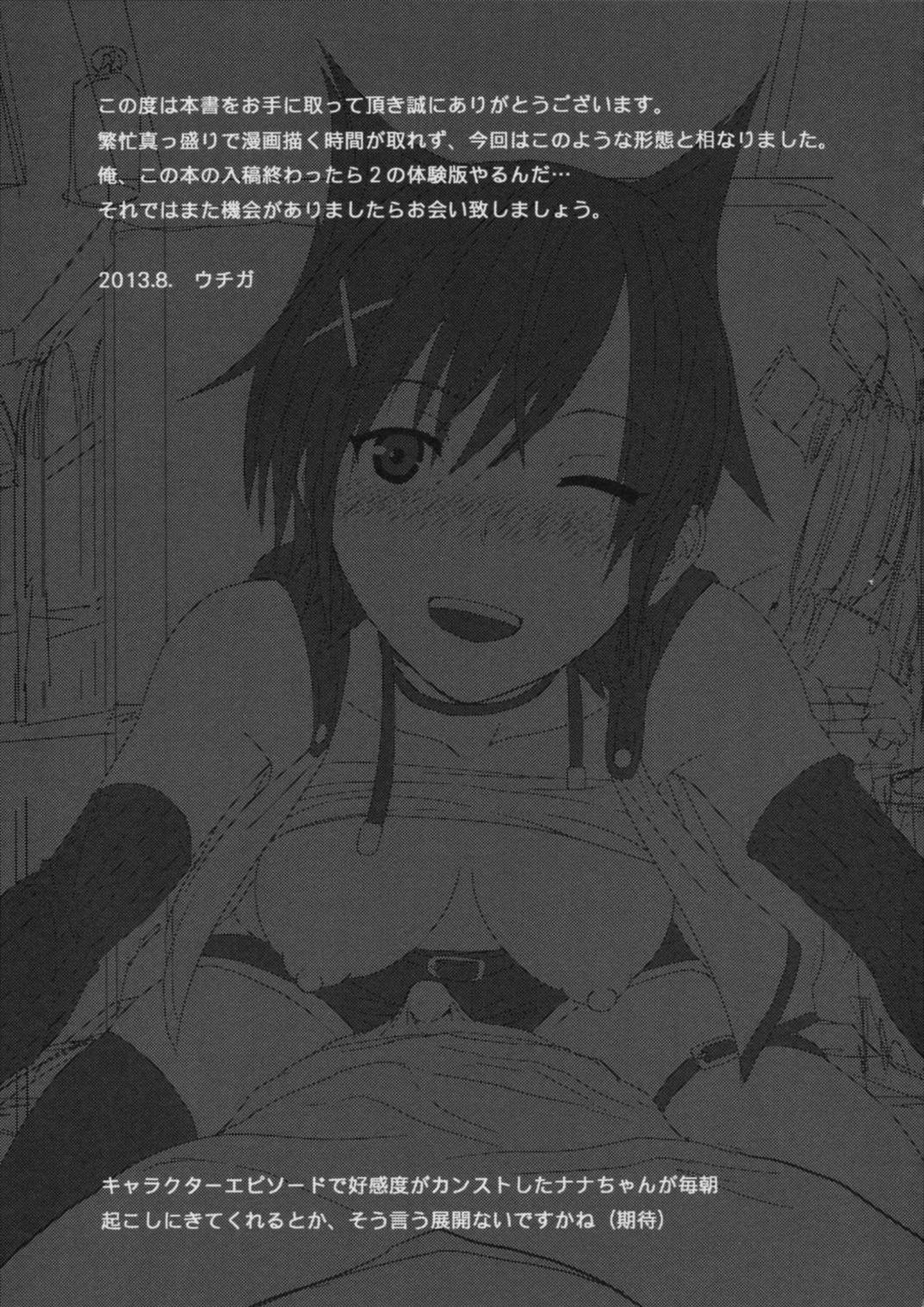
「ぁっ…はぁ……あ…ん…」
俺の上に腰掛ける彼女が腰を振る度、ちゃぷちゃぷと小さな水音が立ち、水面には幾重にも波紋が刻まれていく。
水面下ではいきり立つ俺の陰茎を彼女の細い肢体がくわえ込んでいる。
「ああ、気持ちいいわ…ぁ…」
ほう、と熱い吐息を吐き出して彼女は笑った。
泉水は冷たすぎずぬるすぎずな丁度良い冷たさで、戦いで火照る身体に心地良い。掌に水を掬って俺の肩を流しながら、彼女は口を開いた。
「綺麗でしょ、ここ。任務中に偶然見つけてね……はぁ、んっ……いつか、貴方と二人で来たいと思ってたのよ…」
光栄だ、と答えると、彼女はくすくすと笑った。
「あら、それならもうちょっと嬉しそうな顔をして欲しいわ」
…無愛想な顔は生まれつきなんだが。そう言うと、また彼女は笑った。
「ふふ…素直じゃないわよね、貴方って。そこが貴方らしいけど…」
俺は気恥ずかしくなり、視線を反らした。大して年齢の離れない女にからかわれるのは面白くない。だが、彼女が相手ならそう悪い気分でもない。
目の前で彼女の平坦な胸が上下動している。その先端で存在を主張する桜色の蕾に、俺はむしゃぶりついた。
「あんっ…もう、甘えん坊ね……あ……あぁ……あ…っ…」
耳元で囁かれる喘ぎ声を感じながら、俺は無心に腰を振った。揺らめく水面がきらきらと輝いて、透き通る様な彼女の裸身に光の波紋を幾重にも映し出していた。

「あ…」
「初めて見る物じゃないだろう」
「間近で観察するのは初めてです。これがソーマの陰茎なんですね」
「…色気のない言い方だな。別に構いやしないが」
「では……『ペニス』と呼んだ方が？」
「英語読みにしただけだな」
「まだ堅いですか……『摩羅』はどうでしょうか」
「……そっちに飛ぶのか。意外性はあるが…」
「少し仰々しいかもしれませんね…では、『ちんぽ』はどうですか」
「……。もうそれでいい…」
「了解。ではフェラチオを開始します」
「いちいち報告風に言わなくていい」
「了か……わかりました」
「……」
「……ん……ちゅ……」
「……」
「……はぁ……くちゅ……」
「…ところで、その言葉とか、何処で覚えた」
「んぷ…ちんぽ、ですか？　コウタの所持しているカートゥーンです」
「アイツめ…」
「ノルンのデータは検閲を受けていますから、こういった、その……俗な情報はなかなか見られません。案外、ああいう書物も馬鹿に出来た物ではありませんね」
「あまり参考にし過ぎるな。実際にやるのとは違う」
「それは理解しています。だから、フェラチオもこうして実践してみたかったんです」
「いきなりフェラさせろとか言うから何事かと思ったぞ」
「すみません。迷惑でしたか？」
「そう言うわけじゃないが…」
「……ちゅる……っぷ……はぁ……」
「……」
「…んっ……は…」
「……」
「…はぁ……今、ふと思ったんですけど」
「何だ？」
「早乙女砲と、イバラキと、獣砲…あと、真竜砲」
「……？」
「ちんぽみたいですよね。形とか」
「好きで使ってる連中に謝れ」

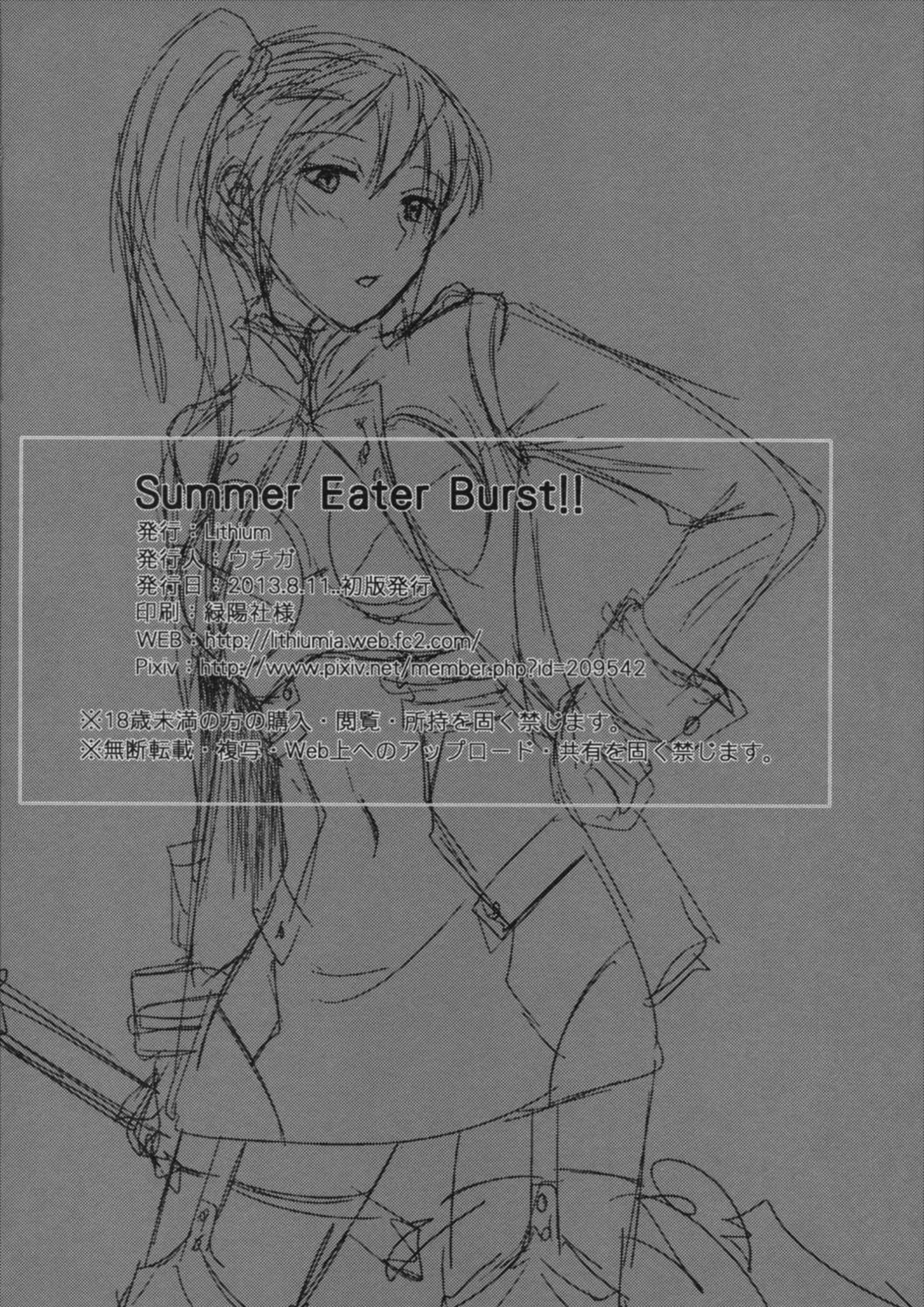
「あのさ…やっぱりシャワー浴びてもいい？」
「どうして？」
「どうして…って、やっぱり匂いとか、気になるし」
そう言うところはリッカも女の子だな。まぁ、女に限らず、汗ばんだ身体の匂いを嗅がせろと言われていい気がする人間は希有だろうが。
「そうか？　リッカの匂いならオレ、何時間でも嗅いでられる自信あるよ」
実際、いい匂いだと思う。汗と金属と機械油の匂い。一生懸命働いてる女の子の体臭。素敵じゃないか。まぁ、オレが特殊なのは認めるけど。
「はぁ…君がそういう性癖持ちだなんて、付き合う前は思いもしなかったよ…」
「幻滅した？」
「ううん。もういいけどね、別に」
リッカは肩を竦めた。「リッカの匂い嗅ぐとすごい興奮するんだよね、オレ」とカミングアウトした時の、彼女の呆気にとられた顔は今も忘れられない。付き合いが長くなった事もあって、現在はオレのそう言う困った部分も大分受け入れてくれている。あんまり度が過ぎるとスパナが飛んでくるけど。
「心配しなくても後で一緒にシャワー浴びるぞ。身体の隅々までキレイにしてやるから」
「えぇ？　それはちょっと……でも、私に拒否権はないんだろうね…」
「よくわかってるじゃないか」
汗を吸ったタンクトップの芳香を胸一杯に吸い込みつつ、華奢な鎖骨、小振りな乳房、引き締まったお腹に舌を這わせていく。
カーゴパンツに手をかけ有無を言わさず引き下ろし、股座に顔を突っ込んだ。
「やっ、ちょっ、待っ」
泡を食うリッカを余所に、色気のない下着越しに彼女の女の子の部分をしゃぶる。
「あっ、ダメ、そんなのダメっ」
より濃密なリッカの匂いが鼻孔を突いた。オレはどうしようもないほどの興奮を覚え、無心で舌を繰り、アソコを舐め回す。ショーツに染みているのは汗だけではないのだろう。グショグショになったそれを口に含み、染み込んだ彼女の体液を吸った。
「ああっ…は、恥ずかしいよ…」
羞恥に耐えかねたリッカが両手で目を覆い、嗚咽にも似た声を漏らす。その有様に、オレは罪悪感を覚えるどころか、堪え難い劣情に襲われた。痛いほどに勃起した自身をもどかしく取り出し、先端を彼女のソコにせわしなく擦り付ける。
「あぁ……っ」
敏感な箇所に触れる異物の感触にリッカが小さな喘ぎを漏らす。その唇を塞ぎ、身体を強張らせるリッカの片脚を抱え上げ、有無を言わさず挿入した。

この度は本書をお手に取って頂き誠にありがとうございます。
繁忙真っ盛りで漫画描く時間が取れず、今回はこのような形態と相なりました。
俺、この本の入稿終わったら２の体験版やるんだ…
それではまた機会がありましたらお会い致しましょう。

2013.8.　ウチガ



キャラクターエピソードで好感度がカンストしたナナちゃんが毎朝
起こしにきてくれるとか、そう言う展開ないですかね（期待）



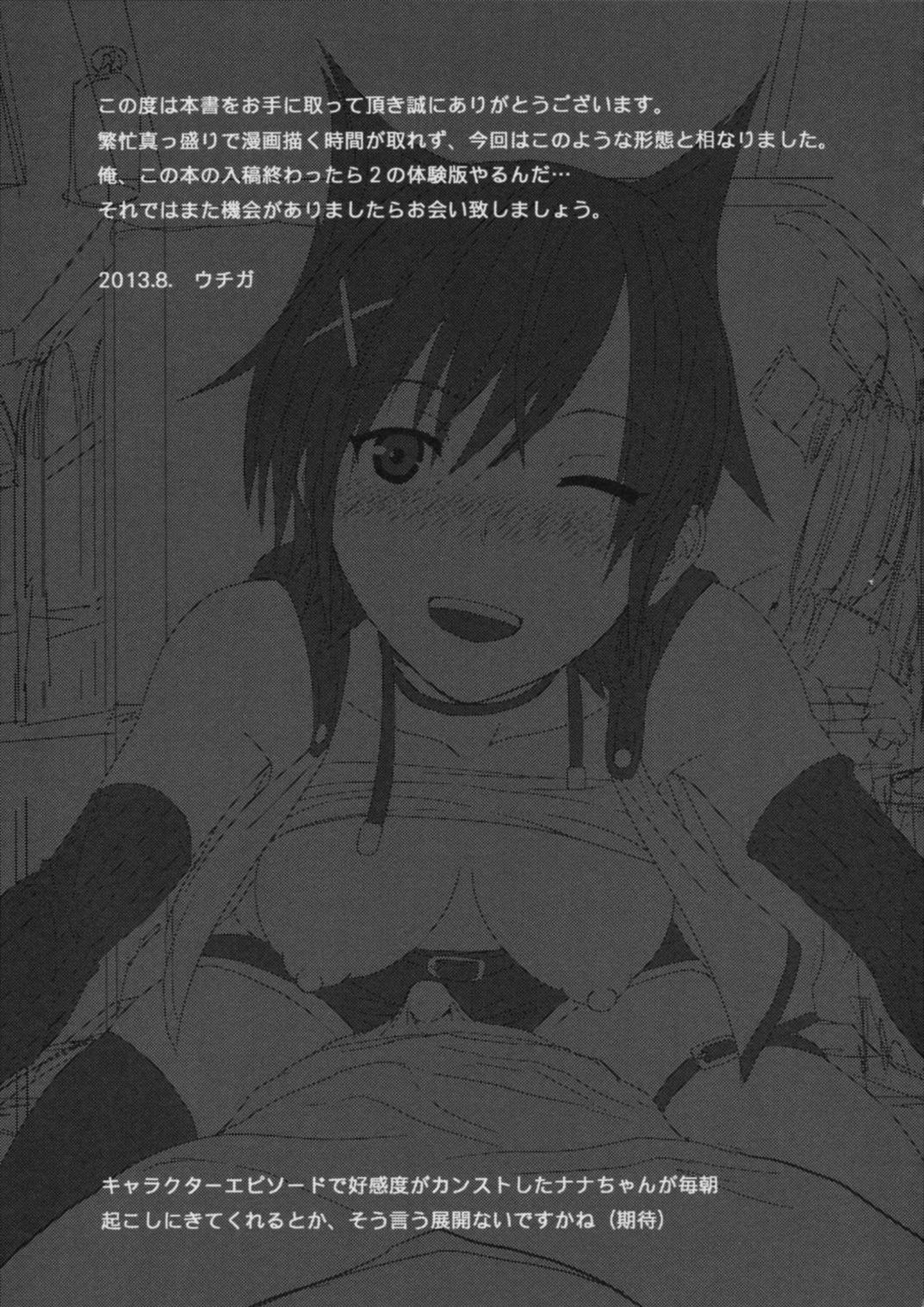
Summer Eater Burst!!

発行：Lithium
発行人：ウチガ
発行日：2013.8.11.初版発行
印刷：緑陽社様
WEB：http://lthiumia.web.fc2.com/
Pixiv：http://www.pixiv.net/member.php?id=209542

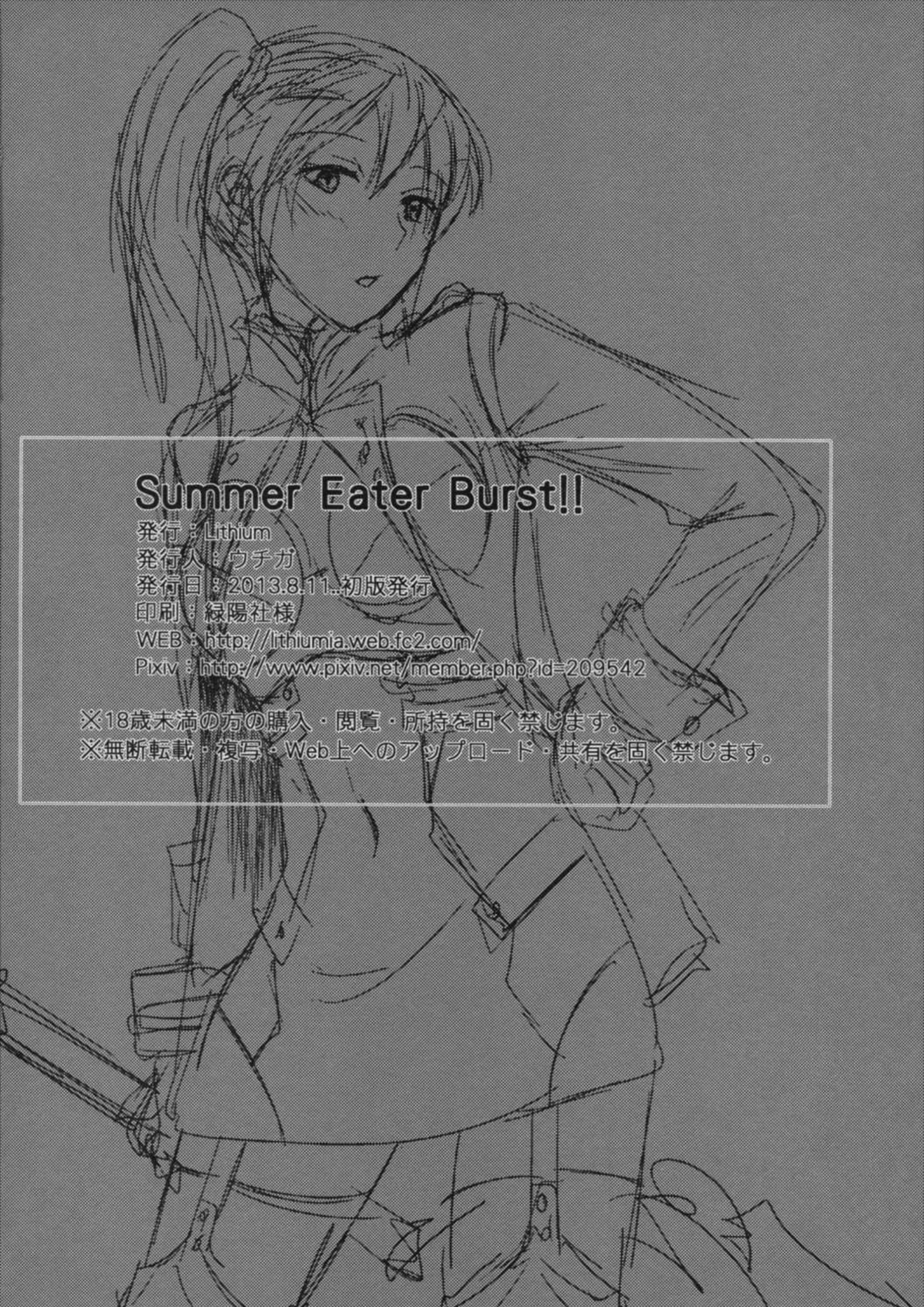
※18歳未満の方の購入・閲覧・所持を固く禁じます。
※無断転載・複写・Web上へのアップロード・共有を固く禁じます。

この度は本書をお手に取って頂き誠にありがとうございます。
繁忙真っ盛りで漫画描く時間が取れず、今回はこのような形態と相なりました。
俺、この本の入稿終わったら２の体験版やるんだ…
それではまた機会がありましたらお会い致しましょう。

2013.8.　ウチガ



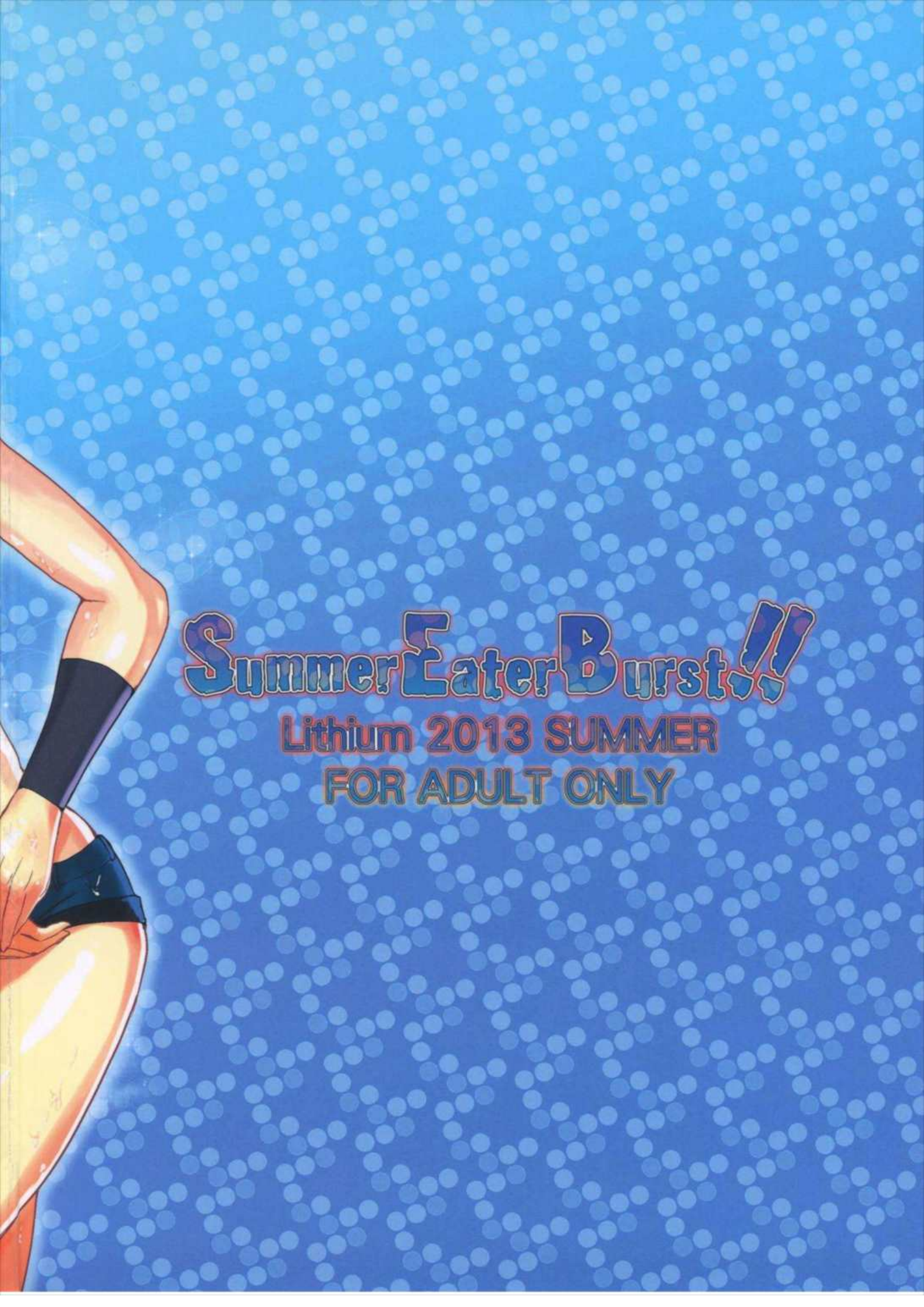
キャラクターエピソードで好感度がカンストしたナナちゃんが毎朝
起こしにきてくれるとか、そう言う展開ないですかね（期待）



Summer Eater Burst!!

発行：Lithium
発行人：ウチガ
発行日：2013.8.11.初版発行
印刷：緑陽社様
WEB：http://lthiumia.web.fc2.com/
Pixiv：http://www.pixiv.net/member.php?id=209542

※18歳未満の方の購入・閲覧・所持を固く禁じます。
※無断転載・複写・Web上へのアップロード・共有を固く禁じます。


Summer Eater Burst!!
Lithium 2013 SUMMER
FOR ADULT ONLY